【習作】ネギま世界にドラクエ系技能持ちで転生する話【テンプレ】

ｌｃｈ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大掃除をしていたら見つけたスーファミとドラゴンクエストⅢ。懐かしくなって通しでプレイ。長い時間をかけて、ついに神竜を倒した。願いを言えと語る神龍。そこには通常には存在しない選択肢があり、好奇心からその選択肢を選んでしまう。神竜が話し終えた瞬間、画面にノイズが走り――

テンプレ系小説。

ドラクエ系技能持ちオリ主。

習作のため突然内容が変更されることがあります。

更新速度陸の亀。

アンチ・ヘイトは念のため。

感想、誤字脱字の報告等よろしくお願いします。

目次

プロローグ ―― 1
レベル1 ―― 7
レベル2 ―― 10
レベル3 ―― 14
レベル4 ―― 21
レベル5 ―― 24
レベル6 ―― 29
レベル7 ―― 32
レベル8 ―― 34
レベル9 ―― 36

プロローグ

はなす　じゅもん
どうぐ　しらべる
▶つよさ　さくせん

アデル
ゆうしゃ
せいべつ：おとこ
レベル：99
ライアス
せんし
せいべつ：おとこ
レベル：99
ニコライ
そうりょ
せいべつ：おとこ
レベル：99
サマンサ
まほうつかい
せいべつ：おんな
レベル：99

＊「ほほう……。
ここまで　たどり着ける
人間が　いたとはな。
＊「私は　神竜。
天界を　治める者だ。
神竜「いいだろう。ここまで来た
ほうびに　そなたの願いを

ひとつだけ　かなえてやろう。
神竜「ただし！
この私を　打ち負かすことが
できたならだ……。
神竜「いくぞ。用意は　いいか？

▶はい
いいえ

しんりゅうが　あらわれた！

しんりゅうは　こごえる　ふぶきを　はいた！
アデルは　５８のダメージを　うけた!!
ライアスは　８３のダメージを　うけた!!
ニコライは　８６のダメージを　うけた!!
サマンサは　６６のダメージを　うけた!!

ニコライは　スクルトを　となえた!!
アデルの

しゅびりょくが　１５９あがった！
ライアスの
しゅびりょくが　１４８あがった！
ニコライの
しゅびりょくが　１３７あがった！
サマンサの
しゅびりょくが　１４７あがった！

しんりゅうは　イオナズンを　となえた！
アデルは　９６のダメージをうけた!!
ライアスは　１０２のダメージを　うけた!!
ニコライは　１１０のダメージを　うけた!!
サマンサは　１０７のダメージを　うけた!!

ライアスの　こうげき！
かいしんの　いちげき！
しんりゅうに　３３１の　ダメージ!!

しんりゅうは　いっきに
のしかかってきたっ！
アデルは　１０９のダメージをうけた!!
ライアスは　１１０のダメージを　うけた!!
ニコライは　１２１のダメージを　うけた!!
サマンサは　１３０のダメージを　うけた!!

サマンサは　メラゾーマを　となえた!!
しんりゅうに　１７８の　ダメージ!!

アデルは　ギガデインを　となえた！
しんりゅうに　２１９の　ダメージ!!
しんりゅうを　たおした！

しんりゅうを　やっつけた！
それぞれ
１２５００ポイントの　けいけんちをかくとく！

神竜「みごとだっ！
　この私を　２８ターンで
　打ち負かして　しまうとは……。
神竜「ひさしぶりに　心から
　楽しませて　もらったぞ！
神竜「いいだろう。
　そなたの願いを　ひとつだけ
　かなえてやろう。
神竜「さあ　願いをいうがいい。

　あたらしい　すごろくが　したい

ちちオルテガを　いきかえらせたい
エッチな　ほんが　よみたい
▶ふしぎな　ぼうけんが　したい

神竜「ふしぎな　ぼうけんが
したいのだな？
神竜「では　そなたを　ことなる
せかいへ　つれていって　やろう。
ほんとうに　よいな？

▶はい
いいえ

神竜「よい　へんじじゃ！
これより　そなたを
つれていくと　しよう。
神竜「では　さらばじゃ！

レベル1

――それはアデル・アリアハンが6歳になる誕生日のことであった。

「起きなさい。起きなさい。私の可愛いアデルや……。今日はお前が始めて魔法を習う日だったでしょう。この日のために母さんはお前を立派な魔法使いの子として育てたつもりです。さあ母さんについていらっしゃい。」

母親に揺すり起こされ、誕生日の豪華な朝食を食べ終えると、食器を片付けて母親と対面する。今日は魔法使いである母親から魔法を教わる日だった。

「いいですね、私の言うとおりに呪文を復唱しなさい。――プラクテ・ビギ・ナル　アール(火)デス(よ)カット(灯)(れ)」

折角母親から教わった呪文なのだが、アデルは何か違和感を感じる。

この呪文は『違う』。何が違うのかはアデル自身には分からないけれど、これを発動することはできない。そう感じた。

しかし母親はアデルが感じる違和感を知ってか知らずか、呪文の発動体である小さな杖を渡して「さあ、やってみなさい」と促す。

アデルは杖を取り、呪文を唱える。「――プラクテ・ビギ・ナル――……アール(火)デス(よ)カット(灯)(れ)」

呪文は何の効果も示さず、杖の先から火を生み出すことはなかった。

「最初はうまくいかないものです。さあ、続けましょう――」

魔法の練習を続けようとした数瞬後、殴りつけるようなノックの音が飛び込んでくる。

「この家に魔女が住んでいると通報があった」

魔女狩りの審問官が来た。

「妻の母乳の出が悪くなった」「何処其処の息子が病気になった」「あんたの家の煙突から出る煙は料理ではなく毒薬を作っているに違いない」

荒唐無稽な話だった。しかし魔女狩りに来た審問官にとって出鱈目だろうと知ったことではない。疑われた時点で母の命運は決まっていた。

まず裸にして全身の毛を剃られた。――母親は屈することなく前を見つめ続けた。

縄で身体を縛り上げ、鞭で叩きのめした。――母親は屈することなく、泣き言も言わなかった。

ペンチで指をギチギチと絞めあげる。――母親は屈することなく、苦悶の表情を浮かべた。

身体に熱く焼けた焼き鏝を押しつける。――母親は屈することなく、脂汗を滲ませていた。

身体を縛りつけて手足を四方に引っ張り、間接を全て外された。――母親は屈することなく、四肢を人間には不可能な方向へと向けていた。

手足の指を一本一本切断する。母は屈しなかった。――母親は屈することなく、四肢を広げたまま言った。

「私はこのような辱めにも、暴力にも屈することはない」

拷問に屈しない母に対し業を煮やした審問官は対象を変えた。その対象として選ばれたのは僕だった。

母親は、いとも簡単に屈した。

「自分こそが魔女だ」と自白した。「その子供は関係ない。儀式の生贄の為に飼っていたに過ぎない」そう言って矛先をアデルから逸らそうとした。審問官は満足そうに母親を縛り上げた。

母親は魔女として裸のまま、村の広場に縛り上げられ、火を掛けられた。

母親だったものは黒く焼け焦げ、得も言われぬ臭気をまき散らした。

審問官たちは家財道具一切を家から取り上げ家にも火を放った。

たった一人残されたアデルは目の前で起こった出来事に対応できず、呆然とその光景を見つめ続けた。

逃げ出すこともできずに自身も縛り上げられ、火を掛けられ、気が付いた時には母親と同様に死んでしまっていた。

レベル２

「――様、母様、母様」

「――キティ、エヴァンジェリン、エヴァンジェリン」

私は、エヴァンジェリン・Ｋ・マクダウェル。体の弱い私は、療養のために小さいけれど素朴で空気の美味しい領地を治める領主の城へ預けられ、少なくない援助をされながら何不自由ない生活を送ってきた。

　幼少の頃から病気がちで、それほど長くは生きられないと医師に診断されていたけれど、それでも限られた時間を精一杯使って愛してくれる両親。なにも返すものがない私たち家族を援助してくださる領主夫妻。

　長く生きられなくても、成人することすら絶望的だと言われても、私はそれでも幸せだった。

『――体調が良かったら、家族みんなで釣りに行こう、キティ』

　今日は私の１０歳の誕生日。体の調子も良く、掛かり付けの医師から外出の許可が出たため、家族水入らず釣りへ出かけることになった。

目的地へ続く道を歩く途中、複数の馬の足音が聞こえる。ふと気になり振り返ってみると、遠く続く道の先からローブを纏った一団が馬に跨り近づいてくるのが見えた。

領主の館へ帰ると、客人が待っていた。それは先ほど遠くから見えた馬に跨る一団で、母様が言うには、彼らは私の病気を治すために来てくださったらしい。治療が成功すれば私も他の子たちと同じように走り回ることができるようになるのだとか。

――――――――

――――――

――――

――――

―――

――

確かに、結果だけを見れば私の病気は治った。

吸血鬼(ばけもの)に生まれ変わることによって。

「――死なない身体だ」

「死な…ない？」

「死なず、滅びぬ不滅のからだ。君の望んだ力だろう？　キティ……いや『不滅の子猫(アタナシア・キティ)』と呼んだ方がいいかな？」

私に処置を施した男曰く、私は『真祖の吸血鬼』というものになったらしい。決して死なず、決して滅びぬ、不死身の化け物。

――いやだ……そんなのいらない……ッ！　いやッ……！

私はそんなもの、望んでなんかいない！私が望んだものはこんなものじゃ――！

気が付いた時には、男の首筋に噛み付き、血を啜っていた。
身体を支配する飢え、渇き。そして精神を支配する怒り、憎しみ。それに抵抗できずに、人間の首に牙を突き立てて血を啜る。まるで、本当に吸血鬼になったようで――。
「――――ッッ!!」
声にならない悲鳴が喉の奥から漏れ出る。帰らなくては、こんな所に居てはいけない。ここは私の居場所ではない。母様と父様の、家族のいる故郷へ帰らなくては。
――母様……！　父様……!!
ローブの男の屋敷から逃げ出し、自分の故郷へと走る。どれ程の距離を走ろうとも疲れを知らず延々と走り続けることができ、否が応にも自分が人間（ヒト）ではなくなったことを感じる。
恐ろしかった。自分の変化が、人外（かいぶつ）へと変わってしまった自身の身体が。
母様と父様に会いたかった。これは質の悪い夢なんだと、何時もの様に頭を撫でて寝かしつけて欲しかった。

しかし、たどり着いた故郷は、変わり果てていた。
「母…さ……」
家屋は轟々と燃え盛り、領民はろくな抵抗も出来ずに、槍に貫かれて地に縫い付けられ、その場に屍を晒す。――その中には両親や領主夫妻の姿も見えた。
私はその日、人間（ヒト）としての身体と同時に故郷（かぞく）も失った。

――――――――

――それからの世界は、延々と、延々と、どこまでも、どこまでも、いくら歩き続けても、誰にも会わず、待つ人はいない。無限に続く荒れ野のような、目覚めの来ない悪夢のような。そんな地獄だった。

寒さに凍え、飢えて眠り、蹴られ、蔑まれ、血に濡れて戦った。

『死なない身体』……？　病気の私のためだと言った。でも、こんな地獄を生き続けても、こんな何もない世界を歩き続けても、その先にはきっと何も……。

レベル3

母さんと同様に焼け死んだはずだが、気が付くと焼け落ちた我が家の跡地に倒れていた。

どれだけの時間が流れただろうか、意味も分からず呆然とへたり込んでいると、何処からともなく突風が吹き、花弁が舞う。堪らず目を閉じていると風が止んだ。目を開けるとそこには、華美な装飾の施されたドレスをまとった貫禄のある大女がいた。

大女はアデルをじろりと鋭く睨め付けた後、一言告げる。

「あんた、一度死んだね」

大女はアデルを興味深そうに観察しながら告げる。その言葉は間違っていないだろう。アデル自身、魔女狩りの連中に磔にされ、焼き殺された記憶が鮮明に残っている。

「私はダーナ。ダーナ・アナンガ・ジャガンナータ。『狭間の魔女』何て呼ばれているよ」

周りに花弁を撒き散らしながら大女、ダーナは威厳たっぷりに自己紹介をする。

アデルも吃りながらではあるが、アデル・アリアハンと名乗った。

「こんな場所で立ち話するのも何だ。私に付いておいで」

そう言って、その場に白い綺麗な扉を出現させる。

ダーナは扉を潜り、さっさと来るようにとアデルを急かす。アデル自身も彼女の後を追いかけるように扉を潜った。

ダーナと名乗る大女に連れられて移動した場所は先程までの古ぼけた寒村とは様変わりして、空中に浮かぶ巨大な美しい城のバルコニーのような場所だった。
ダーナが言うには『次元の狭間』という空間に浮かんでいるらしい。彼女が『狭間の魔女』と呼ばれる所以なのだとか。
「さあて、何故あんたを此処に連れてきたか教えてやるよ」
アデルにはダーナの言っている意味はよく分からなかったが、彼女は『不死者』という存在らしい。正確には『吸血鬼の真祖（ハイ・デイライトウォーカー）』。訝しげに見るアデルに対してダーナは腕を切り飛ばしてはすぐ再生させたり、上半身を消し飛ばしては華やかに復活して実演してくれた。
そして、アデル自身も『不死者』であるらしい。
「にしてもあんた、変な能力だね。その場では復活しない、回数に制限もなさそうだ。何らかの加護を受けているか、何らかを代償に要求されるタイプかね？」
加護もしくは代償で復活していると言われても、アデルには加護を受けた覚えも無いし、代償に何かを失った喪失感も無い。失うモノも無い。
「それに魔力も。大きな枠組みで見れば同じ魔力だけど、私らの使う魔力とあんたの魔力は全くの別物だね。あんたには私らが使うような魔法は使えないだろう」
そう言われてみれば、とアデルはふかくおもいだす。アデルには『火よ灯れ（アールデスカット）』を使う事が出来なかったし、発動するイメージも一切わかなかった。
もしもあのまま、母親に言われるがままに魔法を練習していても発動する日はついぞ訪れなかっただろう。
「ふうむ、私が稽古つけてやるつもりだったけど、止めておこう。こっ

ち着いてきな」
また移動するらしい。アデルは何も言わずダーナの後に続いた。

―――――――

城の中、長い廊下を進んだ先。ダーナは突き当たりの扉を開ける。部屋の中は『これぞ魔法使いの研究室！』といった様相で、部屋の中央には、ジオラマ模型のような小さな大地が、ボトルシップのように浮かべられた大きなフラスコが設置されていた。
「さあ、こいつに魔力を注ぐんだ。私特製の『ダイオラマ魔法球』だよ。実験用に用意していたんだが、あんたの魔力を注いだ方が面白い結果になる気がしてね」
魔力。母親によって教えられてきた魔法に必要な力だ。アデルは習った通りに魔力を操作し、大きなフラスコ――ダイオラマ魔法球に魔力を流していく。
魔力を注ぎ込まれたダイオラマ魔法球は発光を始め、中に浮かんでいた大地は少しずつ形状を変えていく。
「今あんたの魔力が注ぎ込まれて、あんたの魔力に合った魔法球に変化しているのさ。……にしても、ここまで大きく変わるとは」
光が収まり、ダイオラマ魔法球の中にあったのは――ドラゴンクエストⅠの、アレフガルド大陸だった。

「ふーむ。……あんた、これに見覚えがあるのかい？」
アデルは混乱している。ダーナの言う通り、アデルにはその大陸に見覚えがあった。自身がこの世界に生まれる前の、前世の記憶。転生者であるアデル・アリアハンはそれを覚えていた。
ドラゴンクエスト。伝説の勇者ロトの子孫となり、光を失い闇に覆われた世界で、光を奪った犯人である竜王を打倒して世界に光を取り戻す冒険譚。家庭用ゲーム機で発売されたロールプレイングゲームである。
「その記憶にあるアレフガルド大陸と、この『ダイオラマ魔法球』の中にある大陸がそっくりってことかい」
アデルが前世で寝食を忘れるほどに熱中したドラゴンクエストに登場するアレフガルド大陸。それを忠実に再現してジオラマ模型にしたものが大きなフラスコに入れられた状態でアデルの目の前に出現した。
感動を隠しきれない様子でダイオラマ魔法球にベッタリとへばり付くようにして眺めていたアデルだったが、突如立ち眩みによって尻餅をついてしまう。
「おや、もう魔力切れかい。だらしないねぇ、私はしばらくコレの調整をするからあんたはどっか適当な部屋で休んでな」
そういってダーナはダイオラマ魔法球を指し、アデルを部屋から追い出す。部屋を追い出されたアデルは、よろめきつつも休める部屋を探して歩き始めた。
覚束ない足取りで近くにあった扉を開き、ベッドを見つけたアデルはそのままベッドに向かって前のめりに倒れこみ、気絶するように意識を失った。

「――ほら、何時まで寝てるんだい！　さっさと起きな！　……目ェ覚めたかい。そら、ちゃっちゃと付いておいで。
あんたがこれから暫く暮らす場所に連れて行ってやろう」
朝日が昇り始め、東の空が紅黄色に染まる頃。アデルはダーナに大声で叩き起こされた。ダーナは目が覚めたばかりのアデルを急かして昨日の研究部屋らしき部屋まで連れていき、アデルをダイオラマ魔法球の前に立たせる。
「さあて、これからコイツに……何？　そもそもダイオラマ魔法球とは一体何か、だって？」
ダーナはため息を一つ吐き、アデルに説明を始める。ダイオラマ魔法球とは、別名『箱庭』や『別荘』と呼ばれる魔法の道具マジックアイテムの一種で、現実の大地を触媒にして異空間を閉じ込めた物。異空間内での一日は外での一時間に相当する。ただし、一度入ると内部時間で一日経たないと出ることができない。
今回用意した魔法球はアデルだけが内包する『この世界の魔力とは似て非なる魔力』を使って作り替えられた、この世に二つとない特別製だという。
「精神と時の部屋みたい、だって？　それはまた前世の記憶かい？
……まあいい。
でだ、これからあんたには１０年間この魔法球の中でサバイバルしてもらう」
ダーナはダイオラマ魔法球に手を触れる。するとアデルの足元に魔法陣が現れ、アデルの身体を光が包み込む。
「あんたは不死者だが強者じゃあない。戦い生き残る術（すべ）を知らない。

幾らでも生き返ることができるだけの一般人だ。
そんな戦いの”た”の字も知らない一般人を一から育てるなんてやってられないからね。暫くはこの魔法球内で勝手に生きて、勝手に強くなってもらう。
修行をつけるのはそれからだよ。
なあに、この魔法球内では１０年だが外じゃあ１５２日程度だ。ちょっとした旅行を楽しんできな」
――最低でも、私に一撃喰らわせられるくらいには強くなってから出ておいで。
アデルが光に驚き目を瞬くと、そこは先程までいた研究部屋ではなく、床に魔法陣の輝く玉座が鎮座する部屋だった。
大きな二つの玉座、中央には二つの宝箱。赤い絨毯や装飾に彩られたこの広間はおそらくラダトーム城の玉座の間だろう。
だが、玉座には王は居らず、近衛の兵士も見当たらない。アデルは宝箱を漁り、魔法の鍵を手に入れるとその鍵で扉を開け、無人のラダトーム城から城下町に出た。

――――――

城下町はとても賑わっていた。――人間ではなく、魔物達によって。

雫のような形状の水色のゼリーが町中を跳ね回り、禿鷹の頭と蛇のような体に羽の生えたモンスターが上空を飛び回る。
道具屋では頭部から触角を生やしたコウモリのような翼を持つモンスターが、宿屋では真っ白な毛むくじゃらの巨漢が店番をしていた。
ドラゴンクエストに登場するモンスターが、人のように生活する姿がそこにはあった。

レベル4

不死身となり、故郷を失ったエヴァンジェリンは村から村、街から街へ、追われるように旅を始めた。

吸血鬼の身体と言っても弱点は多い。日光に弱く、日を遮る大きな外套が手放せない。遠目から見れば完全に浮浪者だ。成長しない身体のせいで長く同じ場所に留まることも出来ない。

何が不死身の身体だ。弱点は多く、人間には嫌煙される。

各地を転々とするうち、先立つものが必要になる。路銀を稼ぐために人形を使った大道芸を覚え、何とか飢えることは無くなった。

そうして旅を続ける中で立ち寄った村に留まることとなった。……それが大きな間違いだった。

日に日に成長していく村の子供たち、少しずつ私の背に近づき、越していく。その中で私だけが年を取らない。何時までも小さなお嬢ちゃんだ。

「ーーーーーーーーッッ!!?!!」

「魔女だ……」「悪魔だ……!」

轟々と燃え続ける私の体。

同じ場所に数年と留まれば成長しないことを疑われる。そんな事、気付いていたのに旅を再開することが出来なかった。もしかしたら、この村の人々なら私を受け入れてくれるかも、なんてありもしない夢を見た。そんな愚かな希望を抱いた。

燃える、再生する、燃える、再生する、再生しては燃え続ける、私の身体。……嗚呼、主よ。私が何をしたというのか。

想像を絶する程の痛み、死ぬことすら許されない永遠に続く生き地獄に、声に成らない叫び声を上げながら、私は意識を飛ばした。

次に目を覚ましたのは、雲よりも高い場所に浮かぶ巨大な城。此処は天国だろうか、天国ということは私も死ぬことが出来たのか。

……人を殺した私にも天国へ行く権利があったなんて、と自嘲気味に呟くと、背後から声をかけられる。

「此処は天国なんかじゃないよ、吸血鬼の小娘」

「ーーッ!? だ、誰だ！」

普段の生活では弱点ばかりが目立つが、吸血鬼の身体は優れた点も多い。知覚に優れていることから、吸血鬼に成ってからこれまで私は背後を取られたことがなかった。

其処に居たのは、華美な装飾に彩られたドレスを纏うふくよかな女性。今まで何故気付かなかったのかと思うほどの圧倒的な存在感。

「誰か、か。私はダーナ。ダーナ・アナンガ・ジャガンナータ。あんたと同じ人間の上位種族。『吸血鬼の真祖（ハイ・デイライトウォーカー）』さ」

「人間の上位種族……『吸血鬼の真祖（ハイ・デイライトウォーカー）』それも私と同じだと……？」

此処は次元の狭間に建つ城で、此処に連れてきたのも、私を魔女狩りから助けたのもダーナらしい。

其処からの話は驚愕の連続だった。ダーナは２０００年以上前から生き続ける『貴族』と呼ばれる存在だとか、世界には同じような存在が多数居るとか。

「そして、私は気まぐれであんたみたいな不死者に稽古つけてやってるのさ。望もうが望むまいがあんたは不死になった。力は必要だろう？

……そういやそろそろ１５０日か」
１５０日と言うのが何の日数かは分からないが、それはこの際どうでもいい。
稽古と言ったか？　私と同じ『吸血鬼の真祖』だという彼女がどんな稽古をつけるというのだろう。
「ッ稽古なんて私には必要ない！　ただの人間に遅れはとらない！　さっさと帰してくれ！」
信じては裏切られてきた今までが、私を人間不信にさせる。他人を信用できなくなっていく。
「そのただの人間に遅れをとったからあんなことになったんだろう？」
ダーナの言葉に反論できない。油断していたから、信じていたからなんて言葉も浮かんでくるが、口から出ることはなかった。
「まあ、私を一度でも殺すことができたら予定を繰り上げて直ぐに帰してやるさ。さあ、そのボロい外套一枚なんかじゃなく、これを着るといい」
「な、なんだその布面積の少ないヒラヒラした服は……！　や、やめろーーーーッ!!」
この後めちゃくちゃ着せ替え人形にされた。

レベル5

＊「よくぞ来た　アデルよ！
わしが　王の中の王
竜王である。
竜王「わしは　待っておった。
　そなたのような若者が
　あらわれることを。
竜王「もし　わしの　味方になれば
　世界の半分を　アデルに
　やろう。
竜王「どうじゃ？
　わしの味方に　なるか？
　はい
▶いいえ
竜王「どうした？　世界の半分を
　ほしくはないのか？
　わるい話では　あるまい。
　はい
▶いいえ
竜王「では　どうしても
　このわしを　たおすと
　いうのだな！
竜王「おろか者め！
　思い知るがよいっ！

りゅうおうが　あらわれた！
コマンド？

りゅうおうを　たおした！
りゅうおうを　やっつけた！
竜王の姿が　しだいに
うすれていく……。
なんと！　竜王が　正体を
あらわしたっ！

竜王「グァオオオオオオオオオ!!

りゅうおうが　あらわれた！

―

りゅうおうを　たおした！
りゅうおうを　やっつけた！

なんと竜王が
おきあがった！
竜王は
成長の限界に　たっしている！

アデルはたくさんの経験値をてにいれた！

―――――――

―

―

―

―

―

「うーむ、Ｌｖ９９になっても勝てぬとは。まっこと恐ろしいやつじゃ」

ダイオラマ魔法球。時間の流れを現実の２４分の１まで縮めた空間で生活できる魔法道具（マジックアイテム）。ダーナに与えられ、内部で１０年間サバイバルしろ、と命令されたアデル・アリアハンは当時６歳だった頃とは比べ物にならない程に成長した。

魔法球に入って直ぐ、初めの頃は酷いものだった。ラダトームの城

下町を何の準備も無しに飛び出し、町の外を跳ね回るスライムに発見され、痛恨のスライム（スラ・ストライク）の体当たりを受けて死に、ラダトーム城の謁見の間で目覚めた。
「それが今では王の中の王、竜王であるわしを相手に修行しているとはな」
　因みに竜王がやっていた前口上は何時もの事で、初めて竜王の住む城に来たときにもやっていた。何度目かに何故あの前口上をするのか聞いたところ竜王曰く「やらねば気合いが入らん。アデルもノリノリだったではないか」とのこと。アデル自身も『ドラゴンクエスト』を懐かしんでかノリノリだった。
「そういえば、そろそろアデルがこのアレフガルド大陸に来てから１０年が経つのではないか？　ダーナとやらに言われていた期限じゃろう」
　アデルが魔法球に籠ってから１０年間。アデル自身も成長し、１６歳になった。外の世界では１５２日程度の時が流れているだろう。アデルは今思い出したかのように慌てふためいている。
「今の今まで忘れていたのじゃな……。アデルが拠点にしていた『蜃気楼の塔』から道具を持っていったらどうじゃ。『大きな袋』や『錬金釜』は外の世界でも役に立つだろう」
　『蜃気楼の塔』は竜王との修行でＬｖ５０を越えたときに記念として渡された『さとりのしょ』という石板に触れてから出現した塔だ。この塔の正体はドラゴンクエストの外伝作品の『ロトの紋章』に登場する賢者カダルが住む魔法の塔である『蜃気楼の塔』に酷似している。
　塔の宝物庫は竜王の城のものと遜色無いほどに潤沢で、映した者の真実の姿を映し出す『ラーの鏡』や、天に向かって振り撒けば石化の呪いを解くと言われる『天使の涙』、先端に使われたマネマネ銀が扉の錠前に合わせて形を変え、あらゆる鍵を開けることができる『最後の鍵』、さらには複数の素材を投入することで別の道具（アイテム）を生み出す『錬金釜』など様々だった。
　『大きな袋』はそういった様々な道具（アイテム）がいくらでも入り、重量も形状も変化しない。アデルは必要な道具（アイテム）を『大きな袋』に詰めて持ってい

くことにした。
『蜃気楼の塔』に遺された様々な『大切なもの』は外の世界でも使い道はあるだろう。アデルは頷くと瞬間移動呪文（ルーラ）を唱え、『蜃気楼の塔』の方向へと光となって飛んでいく。その場には竜王だけが残された。
「……このアレフガルドとアデルの言う外の世界とでは時間の流れに差異がある。次にアデルと会うのは何時になるやら」
――もしかすると、これで今生の別れになるかもしれんな。

レベル6

ダーナという、私と同じ吸血鬼の真祖だという女によって『次元の狭間』に建つ城へと連れて来られて早7日。

明け方、日も出て間もないこの時間にわざわざ起きているのは他でもない。――ダーナを、奴を殺すためだ。

奴を殺すことが出来れば、卒業証書や免許皆伝が手に入り、予定を繰り上げて此処から出ることができる。らしい。さっさとやつを殺してこんな訳の分からん場所から出て行ってやる。

奴が目を覚ますまで、まだ時間がある。この吸血鬼の身体は膂力も脚力も人間であった頃とは比べ物に成らないほど向上している。寝込みを襲えば奴の首をかっ切ることなど訳もないはずだ。

「――何だ……？　そこのお前」

突然背後に気配を感じて振り向く。其処に居たのは帯剣した旅姿の青年だった。

「見かけないガキだ。お前もあのババアに連れて来られた口か」

ババアの小間使い……にしては帯剣しているし、そういった身形（みなり）の人間ではない。パッと見だが、中々の実力者だろう。

あのババアは気紛れで不死者に稽古を付けていると言っていた。大方、私と同じようにあのババアによってこの『次元の狭間』へと連れて来られたのだろう。私には不死性を持たないただの人間に見えて多少気にはなるが、気にせずにダーナの首を狩りに行くことにする。

ダーナの寝所までの道中、自分の背後に先程の青年が付いてきているのは気が付いていたが、邪魔をするつもりは無いようで話し掛けられることも一切なく無事目的地に着く。

「……今日こそ殺る！　覚悟!!」

大降りのナイフを両手に構え、奴が鼾をかいて眠る寝所に向かって飛びかかる。普通の人間に対してならばこれだけで必殺の一撃になる。が、ナイフが首を切り裂くよりも早くダーナの瞼がカッと開き、

右腕を掴まれる。
　左腕に持つナイフで追撃しようにも魔力によってか固定されてしまい動かすこともできない。そのまま拘束魔法で動きを完全に封じられてしまった。
「やれやれキティ、相変わらず芸がないね。何より美しくない」
「ぐっ……あッ……」
　拘束から抜け出すために身を捩れば、ダーナの右手が何かを操作するように動き、その度に私の左腕がギリギリと悲鳴を上げるように骨が軋む。
「いい加減用意してあげた服くらい着たらどうだい」
　何が用意した服だ……！　貴様が普段着ているような毳毳（けばけば）しい服ばかりではないか……！　あんな派手で品の無い悪趣味な服なんぞ着られるか！
　そうやって心の中で悪態をつきつつも動けずにいると、ダーナが私の後ろにいた青年に気付く。
「……おや、あんたは確か…」
　その時、ダーナの周りに滞空していた時計盤から6時を告げる鐘の音が鳴り響く。ダーナは鐘の音が鳴り止むのを待ってから、私を魔力で拘束したまま地面に下ろし、旅姿の青年を紹介する。
「キティ、こいつはあんたより先にこの『次元の狭間』に来ていたアデル・アリアハン。あんたの兄弟子さ」
　私は貴様を師匠だなんて認めてない、直ぐに貴様を殺して此処から出ていってやる。
　しかし、兄弟子だと……？　まだ此処に来てから長くは無いが、一度も見かけたことがない。
　私の怪訝そうな顔から疑問を読み取ったのか、ダーナが答える。
「こいつはちょっと特殊な場所で修行させていたからね。見かけなかったのも無理はない。修行していた場所については……まあ、何時かは作らせる予定だから楽しみにしているんだね」
　そう言ってダーナはアデルに向き直る。そのまま私を置いて何処かへ……おい、どこへ行く、この拘束を解いてからにしろ！　聞いて

いるのか!?　おい！

レベル7

「久しぶりだね、私にとっては半年も経ってはいないが、あんたにとっては10年振りだ。私のことは覚えているだろうね」
アデルは頷く。竜王に言われるまで忘れていたのは内緒である。
アデルのその反応から何かを読み取ったのか、ダーナは肩を竦めて呆れたように首を振る。
「……まあいい、でだ。私に一撃いれられる程度には成長したんだろうね」
この問いにもアデルは頷く。先程とは違い今度は自信満々に大きく頷いた。魔法球内のアレフガルドでは死神の騎士とストーンマンの軍団や巨大なキースドラゴンにダースドラゴン、果てには竜王との一騎討ち二連戦。強敵には事欠かなかった。
「ほぉう、なかなか言うじゃないか。――ならこれくらいは耐えられるんだろう、ねぇッ……!!」
言うや否や、ダーナは一瞬で距離を詰めてアデルの顔面へと拳を放つ。拳は眼前まで迫るが、アデルは焦らずに大きな袋と共に提げて持っていた水鏡の盾を素早く構え、盾の特技であるビッグシールドで弾き返す。
大きく弾かれて仰け反ったダーナの胴に対して腰からはやぶさの剣を振り抜き、返す刀で二撃目を叩き込んだ。
はやぶさの剣による二連撃がダーナの胴を大きく削ぎ落とす。会心の一撃だ。
ダーナは切り裂かれた勢いのまま、血は撒き散らさず花弁を撒き散らしながらぐるんと一回転すると、服まで完璧に再生して此方に向き直る。
「ほぉ……やるじゃあないかい。一撃どころか二撃いれるとは」
隼の如く素早く二度血振りして、はやぶさの剣を鞘に納める。
アデルは、ダーナに一撃いれるために様々な小細工をしていた。自らに素早さ増(ピオラ)強呪文を重ね掛けし、素早さを二倍に増やす星降る腕輪を装備。取り回しの良い小盾である水鏡の盾を何時でも使える位置

に提げ、盾ガード率を上げる盾の特技であるビッグシールドで攻撃を弾き、大きな隙を作った。
隙さえ作ることが出来れば、後は極限まで素早さを上げた一撃を振り抜くだけである。もし外しても二撃目を狙えるようにと、威力は低いが隼のように素早く二連続攻撃が出来るはやぶさの剣を使った。
「いいね、今のあんたにならダーナ流六段をくれてやってもいい。少なくとも初心者は卒業だ」
そう言って懐から初心者卒業の証書を取り出し、アデルに差し出す。アデルも恭しく卒業証書を受け取って大きな袋に仕舞う。
「さあてェ、アデルゥ……」
ダーナの様子が変化する。元から巨体だったダーナだが、明らかにさらに肥大化した身体。顔には刻印が浮かび上がり、黒い影のようなモヤが副腕を形作る。暴力的なまでの圧力を振り撒く魔王。やはり魔王という存在は第一形態だけでは終わらないのだろう。此処からが本番だと言いたげに、舌嘗めずりをしながらじりじりと近づいてくる。
「ここまで美味しく育っているとは、久しぶりに本気を出せそうだ。……そっちも本気で来な。組み手で遊ンデヤロウ」
タラリと冷や汗をかきながら、アデルも大きな袋から稲妻の剣を取り出して構え、十分に補助呪文（バフ）を重ね掛けしてから飛びかかる。

魔王ダーナが　あらわれた！

レベル8

「拘束が解けた……？」
ダーナの施した拘束（バインド）が消滅した。時限式だったのか、ダーナの身になにか起こったのか。そんな事をぼんやりと考える。ダーナとアデルは何処へ行ったのだろうか。取り敢えず先程二人が向かった方向を目指してみようか。

「……ん、何だあの青いのは」
歩き出して直ぐ、青色のプルプルとした物体を見つける。不審に思って近付くと、そのプルプルはビクリと反応を示し、くるりと此方を振り向く。振り向くと表現したには理由がある。一抱え程もある青色のプルプルの物体には丸い二つの目と大きく横に裂けた口が付いていたのだ。
「ぴ、ピキー！」
青色のプルプルが此方を見上げて鳴き声を上げる。なんだ、これは生き物……なのか？　プルプルと震えるナニカはぴょんと一度跳ねると私の着ている外套をくわえてぐいぐいと引っ張る。何だろう、付いて来いということだろうか。
「わっ、わわっ……。まて、ちゃんと付いていくから引っ張るんじゃない」
青いプルプルに先導されるままに連れていかれた先には、傷だらけのアデルが横たわっていた。
――これはまた、派手にやられたものだ。命があるのが不思議な程にボロボロだ。ダーナに連れて来られた人間なのだから死にはしないだろうが。
「で、お前は私に何をして欲しいんだ？」
「ピキキー！」
青いプルプルはアデルが肩から提げていた大きな布の袋を器用に頭に乗せて運んでくる。そして袋の口から身体を突っ込むと一つの箱を取り出す。箱には生命力溢れる青葉がこれでもかと詰め込まれ

ており、一目見てこれがただの草ではないと感じさせられる。
「これを喰わせればいいのか？　傷に貼り付ければいいのか？」
青いプルプルはそのどちらにも大きく頷いた。……ような気がする。身体をただ震わせただけにも見える。取り敢えず私は目に見える範囲で傷にぺたりぺたりと薬草を貼り付け、残りをアデルの口の中に放り込む。
エヴァは　特やくそうを　つかった！
すると薬草が緑色に淡く発光したかと思えば、アデルの身体の傷が綺麗さっぱり消え去っていた。
「……!?」
口の中の青臭さによってかアデルはガバッと起き上がり、目を白黒させている。先程まで死にかけていたとは思えない程に元気だ。
「ピキー！　ピキキーー!!」
青いプルプルは嬉しそうにぴょんぴょんと跳ね回った後、アデルの頭の上に乗って心なしか得意気にしている。
アデルにこのプルプルは何かと聞くと、『スライム』と言う種族のモンスターで、『スラりん』というアデルの仲間（スカウト）モンスターだと説明される。
魔法球から出して良いのか分からず連れてくるつもりはなかった、とか、魔物預かり所に預けていたのにどうやって付いてきたのか、とぶつぶつ呟いていたが当のスラりんは何処吹く風で、頭の上で船を漕いでいた。
アデルはそんなスラりんを見て、大きく溜め息を吐き出した。

レベル９

魔法球を出てから数日が経った。アデルに付いて来てしまったスラりんの処遇についてダーナに聞くと、魔法球から付いて来た事に驚いていたが、飼うことに関しては「自分で勝手に世話をするなら飼うのは問題ないよ、ここは広いからね」とのお言葉を貰った。

そんなアデルが数日の間何をしていたかと言えば、職業の熟練度上げである。

アデルは魔法球内のダーマ神殿にて、職業神ダーマに仕える大神官によって洗礼を受け、自身の内に眠る才能を開花させている。現在は魔法戦士という職業に転職しており、武器に属性を付与する特技や身体強化系の呪文を多数覚える事が出来る堅実な職業だ。

この度、魔法戦士をマスターしたアデルは新たな職業に転職することにした。

現在アデルがマスターしている職業は以下の通りである。

・戦士
・僧侶
・魔法使い
・武闘家
・盗賊
・笑わせ師
・踊り子
・吟遊詩人
・船乗り
・羊飼い
・魔物使い
・道具使い
・魔法戦士
・賢者

最初から転職することができた基本職を１０年で粗方極め、次いで有用な呪文を多数覚える賢者や魔法戦士を極めたアデルは、新たにバ

トルマスターへの転職を決めた。
アデルは特技『ダーマのさとり』を使用する。賢者を極めることで習得した特技で、使用すると職業神ダーマからの天啓が降りてくる。
通常ならばダーマ神殿の大神官の元で祈りを奉げなければ転職できないが、この特技を使えば何処に居ようがダーマ神に祈りを奉げ、転職することができる。
アデルは片膝をついて目を閉じ、ダーマ神に祈りを奉げバトルマスターへ転職することを告げる。すると天から光が降り注ぎアデルを包み込んだ。
アデルを包み込んだ暖かな光が収まり、眼を開けたとき、アデルは自らがバトルマスターとしての道を新たに歩み始めたことを悟った。

―――――――

おかしい。
魔法球の中にいたという様々なモンスター。恐らく魔法球の内部に研究用として捕獲していた魔法世界の生物が、アデルの持つ似て非なる魔力（マジックパワー）により変質した姿。魔法世界（偽りの世界）の生物……そもそもが実在しない生命体。
だから魔法球の外に出してしまえば身体を保てなくなり消滅する、

はず。……だがあのスライムは完全に受肉し、消滅していない。
あのスライムだけが特別？　アデルの仲間（スカウト）モンスターになった恩恵？　それともアデルの魔力によって変質した魔法球内の魔法生物全てが受肉している？
……一度アデルの魔法球に潜って検証してみる必要があるかもしれないね。